ART KISS LETTER

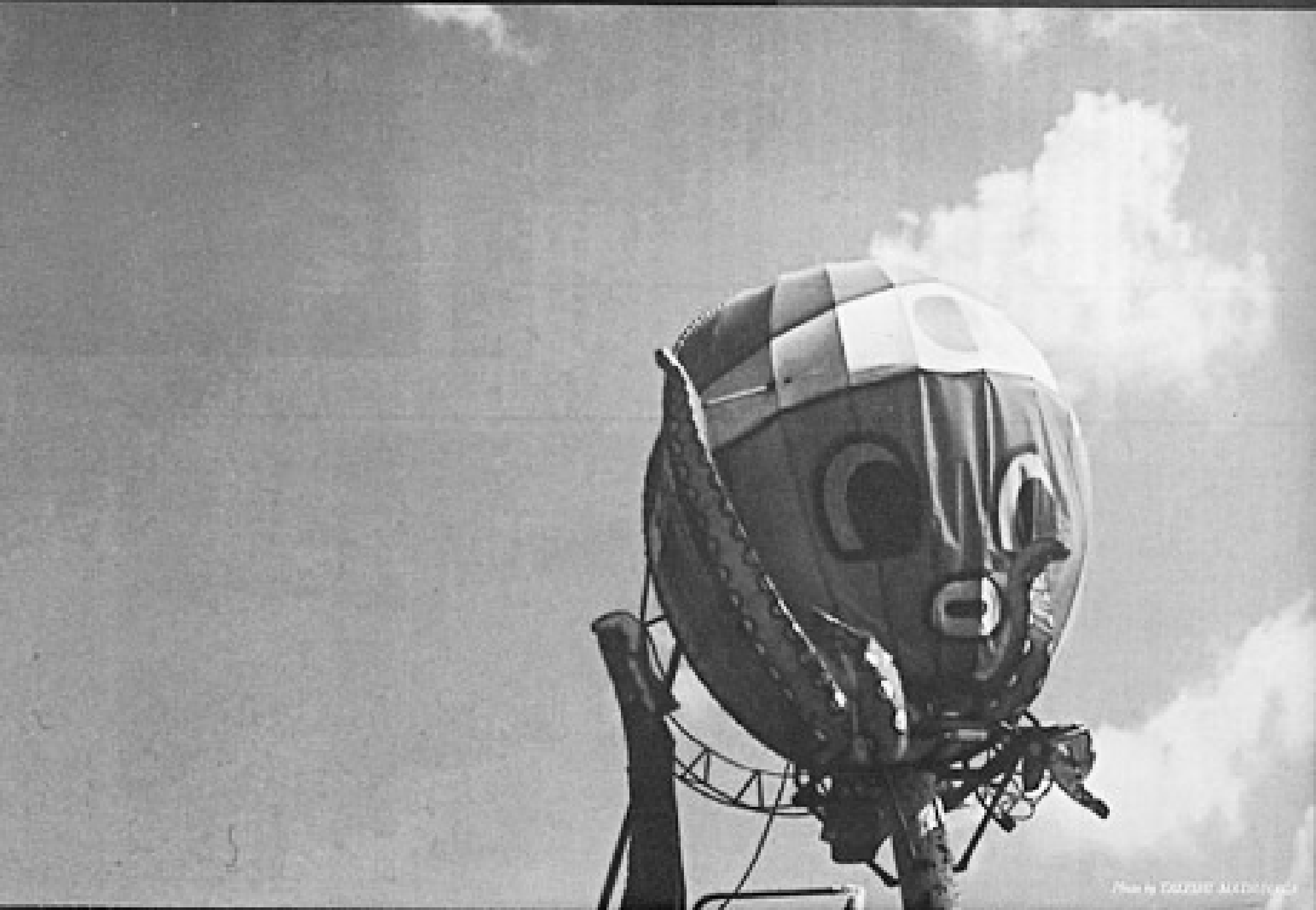
Contemporary Art Museum, Kumamoto

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol. 19

2004.3.15 熊本市現代美術館発行



2003.9.23～2004.2.29のギャラリー展評

【アート・ド・ギャン】ART DE GYAN

※もう、おわかりですよね！熊本弁で「アート、どう？」の意です。

画廊喫茶三点鐘

熊本市手取本町3-8有明ビル　☎326-3040

● **「煙點会書画展」**(1.4－10)書家の井上春嶽さんと杉元研心さんら12人が、25点の小品を額や軸で展示。井上さんは「舒逸」を扁額で見せ、杉元さんは、仙崖和尚の一円相画賛の「これ食ふて茶のめ」を色紙額にしていた。いずれも肩のこらない自分なりの好みで書いているのが楽しい雰囲気にしていた。(S.K)

● **「第二高校彩美会」**(1.21－31)第二高校出身の二彩会の皆さんのグループ展。ギャラリーイケオと二会場で行われている。小品の風景画が多く、思い出のある地をそれぞれ丁寧に描いていた。(H.T)

ジェイ

熊本市大江本町6-9(妹背天神電停前)　☎372-8732

● **「第14回墨に遊ぶ5人展」**(2.11－2.20)詩・書・画の一体化を試みて、5人の書家が小品額など16点を展示。平田抱山さんは、「百寿の祝い」を書き、三嶋天鳴さんは「のんびり走ろういちどきりの人生」と自分のことばと自転車の絵を描く。後藤禎哉さんは水仙の絵に「心施」を店、岩本竹田さんは「ほほえみは最高の化粧である」を書き、徳田翌雨さんは女の髪に増一雄の句を書いていた。(S.K)

アートルーム　イケオ

熊本市新市街6-6　☎324-1414

● **「しらうめ白鷗グループ書展」**(10.1－10.6)県立第一高校卒の白鷗グループの書展である。鶴殿倭女さん、大野律子さん、尾方千晶さん、中村天馨さん、藤森絹子さん、松岡洋子さん、吉弘歌子さん、吉嶺美智子さんの8人のかな作家である。それぞれがキャリアを持ち、大作にいどんでいた。篆書や調和体作品も見られ、明るい会場となっていた。(S.K)

● **「パッチワーク・キルトスタジオMARIKO教室作品展」**(10.15－20)池田万里子さんが主宰する教室が2年に1回行なっている作品展で今回が8回目。講師の池田さんの「ENGLISH　GARDEN」(195×195)は2002年アメリカ・ワールドキルトコンペンション入賞作品で、グラデーションが美しい作品に仕上がっていた。また12人の生徒さんたちによる合作「合同ステンドグラスキルト」(220×160)は淡い色彩の布がステンドグラスを彷彿とさせ、傍らの鮮やかな色彩の花々とのコントラストが目をひいた。

● **「古賀孝子　創作人形教室展」**(10.22－27)古賀孝子さんが主宰する創作人形教室の作品展。小さい頃からぬいぐるみなどの人形を作るのが好きだったと語る古賀さん。あえて表情のない人形を作っているのは、見る人それぞれにいろんな表情を感じ取ってほしいという気持ちの表れだという。同じ型から作られた人形も髪の色や目の色で性格までも違って見え、見る人の表情が映し出されるような感じさえした。(E.Z)

≪古賀孝子　創作人形教室展≫展示風景

イリスギャラリー

熊本市上通り2-17びぶれす熊日会館6F　☎326-1666

● **「第17回蘭心書道展」**(10.28－11.3)書家の有田蘭香さんが指導する社中展で、25人が額や軸などで49点を展示。漢字が主であるが、調和体書やかななど、自分の好きな言葉や歌詞を書にしている。有田さんは、大作も含めて9点見せていた。甫田鶴川さんや故木村知石さんの賛助出品もあった。(S.K)

鶴屋東館8階ふれあいギャラリー

熊本市手取本町6-1　☎356-2111

● **「熊日かな書道教室作品展」**(2.18－2.24)日展会友の書家川俣渓石さんが指導する生涯学習教室プラザの会員作品展。一人一点を額装して展示。川俣さんは原石鼎の「梅白しあたたかき日もさむき日も」を流麗な線で書き、河田三和子さんは「八重桜」を見せていた。会場は小品ながら努力したあとがみられるかな作品が並んだ。(S.K)

12人の生徒みなさんの合作≪合同ステンドグラスキルト≫

アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6 ☎354-2155

● 「本田瑞華社中書展」(10.8－10.13)書家の本田瑞華さんが主宰する書塾の27人が近代詩文書や臨書作品等57点を額や軸等で展示。俳句や詩、歌謡曲の歌詞等をわかりやすい書体で書いており題によくマッチしていた。本田瑞華さんは「鮮」を金文でダイナミックに見せていた。吉田成堂さんも賛助出品していた。(S.K)

● 「土野精二個展」(1.14－1.19)明るく輝くひまわり畑の風景、プラムの花盛りを描いた《花盛りの頃》、高校球児の奮闘を描いた作品等が並んだ。どの作品も清々しい陽光に満ち、みる者を明るい気持ちにさせる。(H.T)

● 「第5回書芸「風」展」(2.18－2.23)日展会友の書家丸山三千代さんが主宰する書展で、24人が43点を展示。丸山さんはサンテグジュペリ作の「星の王子さま」を古い和紙に書き、また、珍しいアクリルの額にモダンな《花》を見せていた。早春にふさわしく、明るくのびやかな作品が多い。成瀬映山(文化功労者)さんも甲骨体で賛助出品していた。(S.K)

熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18 ☎351-8411

● 「第21回深風会遺抜展」(9.23－9.28)仮名(かな)作家の川俣深石さんが主宰する深風会が、熊本県芸術祭文化行事として行う発表会である。今回は上代様仮名のみでなく、読みやすく親しみやすい調和体を取り入れたのが特徴で変化の面白さは見られたが、調和体作品には、歴史が浅いだけに研究の困難さが窺(うかが)えた。

● 「杉本京霞・中村遊苑姉妹展、香花展」(9.30－10.5)漢字作家の姉と仮名作家の妹の姉妹展に、姉杉本京霞さんが指導する香花会の併設展である。姉妹展は流石(さすが)に安定したレベルを保っていた。香花展は、所属する中央の江戸川展を舞台に頑張っているので、画仙紙三分の一の特殊な形に、小粒の上品な作品が多かった。

● 「玉高百周年記念同窓会書道展」(10.15－10.19)県立玉名高校の創立百周年を祝って、新旧職員と同窓生が開いた書道展で、美術展と合同企画し、県立美術館でデモンストレーションの後、玉名市民会館へ移した。全国で活躍している作家も参加して、バラエティーに富んだレベルの高い力作が並んだ。(T.M)

● 「第42回青玄社書作展」(10.15－10.19)書道研究青玄社会員42人のかな作品等約70点を額や軸等で展示。会長の上村方壹さんは手作りの和紙のはがきに「もみじ」や「あざみ」など変体がな等で造形されて、新鮮な書となっている。かなや調和体作品は自分なりの工夫があり、額とよくマッチして明るい会場となっていた。

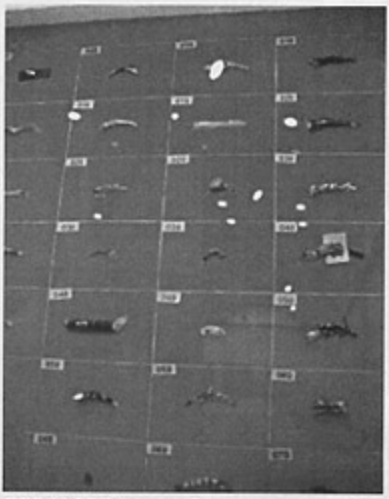
● 「第4回春精書作展」(10.21－10.26)書家井上春嶽さんと中村治泉さんの2つのグループの社中展で、69人が71点を額や軸などで展示。漢字の行草書が主で、調和体書もある。井上さんは「書壁」という古詩をオーソドックスな書風で見せていた。浦川舟径さんも賛助出品していた。(S.K)

● 「第4回春清書作展」(10.21－10.26)春嶽書道会を率いる井上春嶽さんと、清泉書道会を率いた故川上清泉さんとが合同で、県民芸術祭参加行事として始めた書道展である。川上さんの後を中村治泉さんが会長を勤める。かつての自衛隊仲間が中心のようであるが、89歳でなお壮健(かくしゃく)として活動している会員に敬意を表したい。(T.M)

● 「熊中・熊高江原会美術展」(11.5－11.9)卒業生メンバーによる作品展。デザイン、工芸、油彩、彫刻、日本画等さまざまなジャンルが集められ、老若男女問わず芸術を志す人生を楽しむ様子がうかがえた。

● 「第28回熊本県高等学校美術展」(11.5－11.9)非常に見ごたえのある35校参加の大規模な高校生による作品展。熊本工業高校の森義央さん(1年)の《sample》は、いりこ200匹を一匹ずつペイントなどして、全て違う装飾的な表現に仕上げ、それを巨大な標本箱に納めて見せる、というもの。200種のバリエーションを展開する能力と細密な作業を行う技術力には今後の展開を大いに期待させるだけのものがある。もう1点は八代高校の小原瞳子さんと北村和歌子さん(ともに1年)のコラボレーション作品《PAPILIO》。巨大な蝶をフェルト、ファー等のミクストメディアで表現。会場・設営の都合上、会場角に展示され前面などは少々見づらかったが、全体をじっくり作りこんだ作品。絵画作品では、球磨商業高校の松谷詩織さん(3年)の《友》が、画面構図、主題、クリアな質感ともにレベルの高さが感じられた。(H.T)

小原瞳子さんと北村和歌子さんの作品《PAPILIO》



森義央さんの作品《sample》部分

● 「第8回独立書人団熊本支部書展」(11.18－11.24)熊本独立書道会(徳永果鶴支部長)の会員41人と九州独立の会員40人による書展である。古典の臨書作品に、小字数の越渾(ゆうこん)な濃墨作品や、淡墨のにじみのきいた作品が会場に元気一杯あふれていた。大津貫真龍さんの竹簡に般若心経を金文字で書いたのはめずらしい。(S.K)

● 「第26回尚絅大学書道展」(11.26－11.30)尚絅大学文学部の書道コース学生に、OGも参加してのスケールの大きい展覧会である。4年生は古典の臨書か各自の創作かは自由選択。1,2,3年生はすべて古典の臨書であるが、本展の特徴は2年生の超大作である。完成度はともかく若さ溌(みなぎ)るエネルギッシュな表現は快い。(T.M)

● 「日韓友好書道展」(12.2－12.7)熊本県と韓国忠清南道の姉妹提携20周年を記念する友好書道展が県立美術館分館で開かれた。県書道連盟・幹部役員32人と、忠清南道書芸家協会会員40人が1点ずつ展示した。同じ漢字文化の国なので、漢字の表現は同じである。ハングル文字も、毛筆で古体や宮体とか、リズミカルなものや、造形性を生かした作品も見られ、楽しい会場となっていた。

● 「第31回県書道連盟展」(12.2－12.7)県書道連盟の役員と、会員180人が軸や額で出品。漢字、かな、近代詩文、小字数書、てん刻など書のすべての分野が見られ、書風も多彩である。(S.K)

● 「画好会展(油彩)」(12.9－14)伊藤多恵子さん、萩原弘子さん、内田幸子さん、本原晴美さん、北野典子さん、吉田都基子さん、中田千枝子さん、渡辺直美さんによる油彩画のグループ展。身近な題材、旅先の風景などの主題を描く。長年描き続けている熟練した筆遣びを感じた。

● 「第44回熊日写真展」(12.9－14)熊本独特の伝統的な祭りの風景、老若男女の生活の姿、豊かな自然を写した作品が並ぶ。

深川清さんの作品《赤ちゃん十依入り(B)》

● 「第1回卒業制作展　熊本市立必由館高等学校芸術コース」(12.9－14)音楽、美術、書道からなる芸術コースの卒業作品展。特に書道の作品に力強さを感じた。音楽専攻の学生たちの記録も、ビデオ等で展示されると、より現実的な「芸術コースの卒業展」の展示に近づくのではと考えた。教師の皆さんの作品も展示された。

● 「第32回熊本県立第二高等学校美術科制作展」(12.9－14)3年生の卒業制作展とともに、2年生、1年生の研鑽の成果を示す展示。高島悠吏さんの木彫作品《再生の形》は、一木彫の存在感を十分に活かしたものだった。小林陽介さんの映像作品《tsunagari》は、クレイアニメーションの作品で、双頭の人物(兄弟)のやりとりに、人間関係の楽しさやせつなさを描き出した作品で、内容、クオリティともに素晴しい。将来が本当に楽しみである。

小林陽介さんの作品《tsunagari》

● **「九州グラフィックデザイナーズクラブ会員展2003どこかの誰かにおくるプレゼント」**(12.16−21)九州グラフィックデザイナーズクラブ所属のデザイナー達が、「プレゼント」をテーマに、各々個性を出したイメージポスターを展示。ロゴマークやリーフレット、雑誌のページデザインなど、日常生活で多く眼にする様々なデザインの現場で日夜忙しく活躍されるデザイナーさん達が、この展示の自由課題の中で、伸び伸びと自己アピールしている様子がうかがえた。

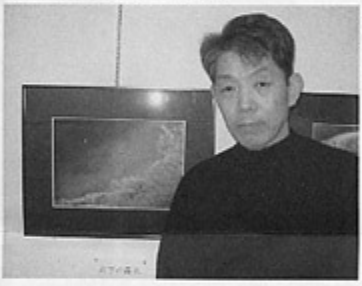
● **「天草四郎イラスト原画展」**(12.16−21)殉教者天草四郎をテーマにしたイラスト展。天草四郎を追悼する念の強い作品が多く、〈天草四郎陣中旗〉(コピー)の展示などもあった。

● **「第26回友枝雄策デザインスクール展」**(12.16−21)軸二点で一組という形式での作品の発表。年末ということもあって、お正月ムードの漂(ただよ)う作品も多い。表具の色、本紙の色、画面の色、とそれぞれの色彩感覚が楽しく表現されていた。

● **「地域／建築展」**(12.16−21)熊本大学工学部の建築系教官と学生有志による展示。各研究分野での成果の発表とともに、八代妙見祭の笠鉾やそれらの修復に関わった記録といった地元の伝統文化財から、黒川温泉観光旅館協同組合事務所建築模型といった環境と観光商業に関わったもの、また古代ギリシア神託の地、デルフィの遺跡発掘など、建築文化の多様な奥深さも感じることが出来る展示だった。(H.T)

● **「第39回熊本県高等学校書道展」**(12.23−12.28)県内公私立の代表が、若さにまかせた力作を発表する書道展である。各校の指導者のカラーが窺(うかが)えて楽しい面と、剛強さを強調した力任せの作品も目立つのが特徴である。そんな中で、鹿亭序にも篆書秀賞が与えられたのにはホッとした。創設の教職員展の中には、流石(さすが)に注目したい作品が並んだ。(T.M)

● **「四季彩展」**(1.6−1.12)自然の情景を主題にした三年に一度の写真展も今回で三回目。原口一郎さん、野添昭造さん、江藤伸二さん、三藤詠美さん、吉川裕美さんは、移ろいゆく豊かな瞬間をやさしく包む眼差しを感じさせるものであった。(Y.H)



作家の原口一郎さん

● **「第19回汲古会書作展」**(1.14−18)日展会友の書家那須球石さんの社中展で、38人が約50点を展示。かな作品が主であるが、調和体作品や臨書作品も見られる。那須さんは伊藤左千夫の歌をあでやかに見せ、昨年の44回熊日書道展のグランプリ熊日賞をとった永田静汀さんのかな作品もあり、注視をあつめていた。白鵬会会長の中村天香さんも賛助出品していた。(S.K)

● **「キャノンクラブ熊本支部10周年記念　大山謙一郎展」**(1.14−1.18)
故郷の矢部に温かな眼差しをむけた大山謙一郎さんの作品と、写真の指導をうけている方々の瑞々しい作品が並んだ。

● **「東光会12人展」**(1.14−1.18)今年は12人に増えての発表。川崎圧平さんの〈鮭Ⅰ〉は、緊張感あるタッチで、空間が構成されている。

● **「第一回くまもと・子どもの美術展」**(1.14−1.25)CDジャケットのデザイン、ポスターなど元気な平面作品が会場に満ちていた。

● **「高田耕平展」**(1.20−1.25)組作品で構成される風景画は、壁面のような重厚な存在感であった。

● **「水墨画朱杏墨之会作品展」**(1.20−1.25)は下村朱杏さんの八代教室、熊本同仁堂教室の32名の方の作品展。効果的な色彩を用いることで、表現に広がりを増していた。

● **「くまもと社会保険センター日本画教室第11回GROUP"雲"展」**(1.20−1.25)河本昇さんの〈目覚め〉は、植物の息吹と外の世界の対比が象徴的。大塚菊江さんの〈在〉では、丁寧に描かれた柳の触感が、効果的に貼られた布でより際立っていた。(Y.H)

大塚菊江さんの《在》

熊本伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35　☎324-4930

● **「各地の注連飾りを集めて」**(12.9−14)全国の正月飾りの注連(しめ)の展示。鶴や亀などおめでたい動物を藁で編んだもの、シンプルなねじり巻きのものなど、各地の特徴が楽しめた。

● **「一光一刀彫「木の仕事」　村上一光個展」**(12.9−14)独学で56年木彫を続けてきた村上一光さんの個展。レリーフにおける花びらの表現の繊細さ、干支(えと)などの動物の愛らしさなど、長く木と向かい合い作品を制作し続けた者の熟練の腕と、木を見る眼の優しさが感じられた。

● **「森からの贈り物　木のおもちゃ展」**(12.9−14)年末年始のプレゼントに好ましい木のおもちゃの展示。ベビー用からコレクター物まで幅広い。

● **「作陶展」**(12.9−14)花器、絵皿、人形、茶碗などの展示。花器には花が活けられて、より生き生きとした展示になっていた。(H.T)

● **「備前焼・日常の器・太田雅之作陶展」**(1.6−1.12)てびねりの茶器、ぐいのみなど使い込んで、なじんでいくのが楽しみな器である。

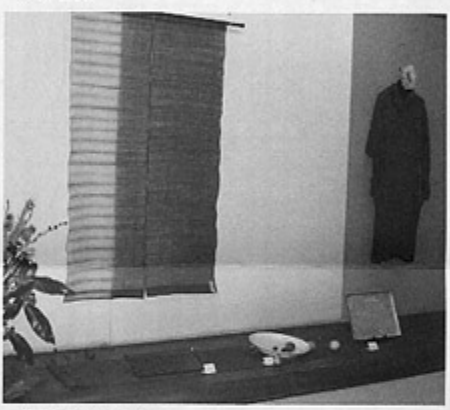
● **「木目込人形・桃の節句、端午の節句展」**(1.6−1.12)福田博子さんによる節句人形は、壮大な空間を醸しだす力強さをもっていた。

● **「味府礼子・器展」**(1.6−1.12)生活にそっと溶け込むようなやさしい色調と造形の器が並んだ。

● **「菊水窯作陶展」**(1.14−1.18)阿部茂孝さんの大型の花器は粘土を重ねる手法が独創的で味わい深い。

● **「いわさき千鶴　天草陶磁器絵つけ展」**(1.14−1.18)伸びのある筆遣いの絵が器に華やかさと軽やかさを生み出していた。

● **「くらしの中で・・・草木染と器展」**(1.14−1.18)肌にやわらかい福田友子さんの草木染の作品、林原あささんのアイデアに富み、多様に演出できる花器等の陶芸作品展。



福田友子さんの作品

● **「堀川ヒロ子・東野百合子　手仕事展古裂あそび」**(1.20−1.25)二人の布への愛情を感じさせる楽しく、安らぎのある作品であった。

● **「郷の工芸展」**(1.20−1.25)東北から沖縄までの多様な工芸品。

● **「幻窯　焼き締の器展」**(1.20−1.25)政岡雄さんのランプシェードや器は、しっかりとした造形、焼き締の手法により、安定した確かさを感じさせる。(Y.H)

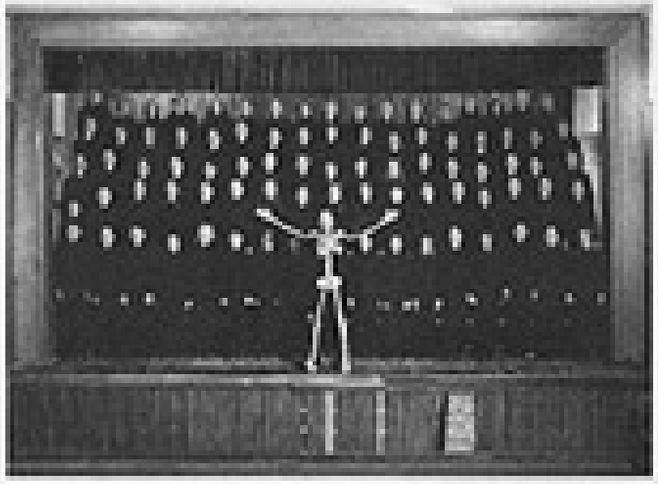
● **「上益城工芸展2004」**(2.24−29)益城・嘉島・御船・甲佐・矢部・清和という豊かな自然に囲まれた場所・工房から生まれた、触れると風の音が聞こえてくる、ぎゅっと自然の暮らし時間がそのまま閉じ込められた作品が伝統工芸館に並んだ。木工や陶芸、染色など温もりある作品が、親る者を生まれた工房へ行ってみたいという気持ちにさせた。(R.Y)

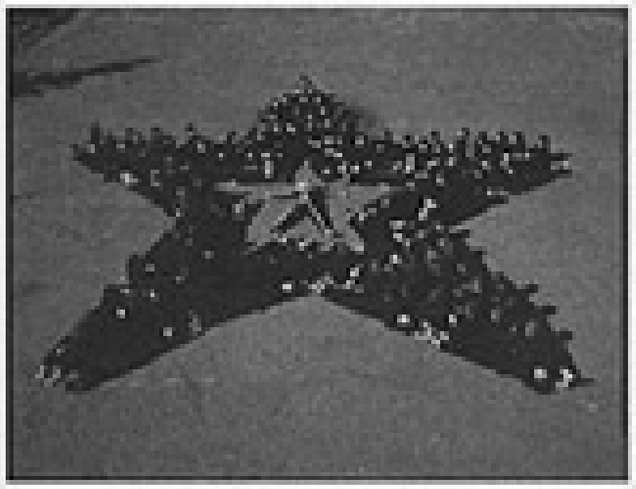
《上益城工芸展2004》の横窯さんの作品

MUSEUM INFORMATION

「マリーナ・アブラモヴィッチ　ザ・スター」展
(2003.11.2－2004.2.1)が開催されました。

日本初の個展で、世界初公開の作品《カウント・オン・アス》を発表！超一流アーティストの怒涛のダイナミズムを体感する展覧会となりました。

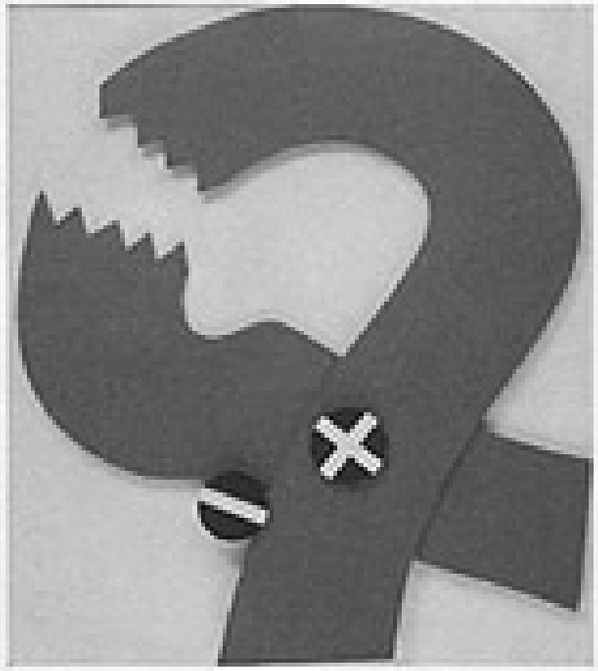




《カウント・オン・アス》2003年、ヴィデオ・インスタレーション

斎藤義重展
―97歳、そのすべてが前衛だった。―
(2004.2.14－3.28)

日本の戦後美術を代表する前衛芸術家、斎藤義重(1904-2001)の、没後初めてとなる大回顧展。合板や石膏、ドリルを用いて構成される大胆で迫力ある作品を通して、既成の絵画、彫刻に鋭い疑問を投げかけた、斎藤の「前衛」そのものとしての生涯を通覧する展覧会です。



《ベンチ》1967年、宮城県美術館蔵

◎今後の展覧会
「鉄腕アトムの軌跡展」(4.7－5.23)
「生人形と松本喜三郎」展(仮称)(6.5－8.15)
各展覧会で開催されるイベントについてはホームページをご覧下さい。
http://www.camk.or.jp

第3回ベルリン・ビエンナーレ
2004.2.14−4.4
3rd berlin biennial for contemporary art

かつてベルリンの壁が存在したベルナウアー通りの「空白」をとらえた写真作品。

Thomas Struth
Bernauerstrasse, Berlin, 1992
colour photograph

アートとデザイン、アートと日常をテーマに、女性の社会的役割をファッション、インテリア作品で表現。

Regina Moeller
embodiment LineTwo
2002
Skirt and coat made from cloth
Collection:embodiment LineTwo:Dagmar Knitfki and Regina Moeller

1998年に始まったベルリン・ビエンナーレは3回目を迎え、初めて「ベルリン」という都市をテーマにしました。今回のキュレーターであるウタ・メタ・バウアーは、東西ベルリンの会場、かつて壁のあった場所に生まれたポツダム広場の映画館の三地点の場の歴史性に注目し、「移住」、「都市の条件」、「音の景観」、「モードとシーン」、「もうひとつの映画」というサブ・テーマのもと、ファッション、映画、都市構造、サブカルチャーの作品が中心となり、都市のように多層的な展覧会となりました。

SUITOTTO☆KUMAMOTO

連続インタビュー　NO.18

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動に寄せる熱い思いを語っていただきます。第18回は上村清彦さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／昭和31年生まれ。西南学院大学英文学科中退。ゼーロンの会主宰。牡羊座。

役者／劇作家／演出家
上村清彦さん
Kiyohiko Uemura

——演劇の世界に入ったきっかけは？

上村：十代の頃に漠然と憧れていたのは、実は古本屋の店主（笑）。永井荷風の世界に憧れていて、知る人ぞ知る硬学になりたかった。高校までは いっつも「一番」じゃなきゃいやだっていうタイプだったんですよ。そうして、大学進学後は勉強しすぎて入院し、大学へは見切りをつけて 。まあ、あとは言えません（笑）。全国を無為に放浪したのですが、その間、本や雑誌を必死に読り締めて生活していましたね。「言葉」が僕の側にずっとあって、僕を救い出してくれていた。熊本に帰ってきたとき、或る人から、舞台の台本の依頼があったんです。「溺けていく蜘蛛のように」と名づけた舞台が公開されたとき、自分の書いた文字が視覚化されたことによって、不安と恍惚が同時に押し寄せてきて、びっくりしました。

——そして、ご自身で演出もされるようになって 。

上村：そう、それでも4～5年間は年に1度の公演のペースですね。先の展望はなかったですね。当時の演出はとても湿気が多く息じくるくらいじっとりとしたもので、「ネオロマン」なんて口走っていました。傾向ががらと変わったターニング・ポイントが、『敗荷－ヴァン・ゴッホへの謝辞』というー人芝居でした。古畳の上で、よれよれの衣物を着て、方言で、巨大なタワシをくくりつけ、雲に日本刀を突き立てているゴッホを演じたときです。コンニャクの雨が降るなか自害するのがクライマックス。生臭さそうでしょう？（笑）そのときに、僕が求めている演技とは、一回性の「出来事」であり、日常の再現ではないんだな、とはっきり気づきました。そして、今から10年前に、ゼーロンの会を結成しました。白蛇マリーさんと東ともみさんとで「去年、ジェルソンミーナと」という舞台をこしらえたのが、旗揚げです。ゼーロンという名は、小説家牧野信一の作品名からもらいました。

——熊本で演劇をすることの難しさといえば 。

上村：演劇文化に対する盛り上がりの無い土地柄のせいでしょうか、「見えない部分を想像力で埋めながら見る」という基本的な演劇との関り方に慣れている観客の方が、少ないようです。「全て、わかり易く教えて見せて欲しい」という幼稚な要望に迎合した恩恵、これを大西巨人は「俗情との結託」と喝破したのですが、真に創造的な仕事がまるで見られない。相変わらずの「自分探し」、内輪受け狙いのギャグやコントの連続、役者の訓練不足。演劇の衰頽と停滞が見えてくる時代で、まさに鎖国的ですね、そういうものに常に反逆していきたい。あとは、演じる場所ですね。ただガランドウな空間で十分なんですが、熊本にはないんです。どなたか格安で提供してください（笑）。演劇批評も熊本では遠絶えてしまっておりますね。舞台もやりっ放しで終わってしまうのも、暖簾に腕押しですよ。記者の意見が的外れでもいい、同じ坦上で各劇団の傾向や実力を批評されることは、演じる者へ自覚を促します。舞台作品の内側まで書きぶが踏み込んで、言葉を費やして欲しいのです。ぜひ新聞の文化欄に復活して欲しい。演劇界に蔓延する緊張感の弛さが、役者が舞台で言葉を貧食してない荷移として表れている。それは他者からの視線を真摯に受け止めることを忘れたところから来ていると思います。小林秀雄の言葉によると「才能とは困難を見つけ出す能力である」そうですので、演劇の世界のなかの困難に常に立ち向かう勇気と愛を心に持ちたいのです（笑）。

——海外での公演を考えていらとか 。

上村：そうですね、どこでもいいんです。演じたその瞬間にガッと反応が響くところであれば。釜山やアヴィニヨンなど国際的な演劇フェスティバルが行われている場所での公演はずっと考えています。舞台作品の最深部まで付き合ってくれて、きちんと批評（むろん賞賛こそほしいのですが）してくれるところなら、どこでもいいんです。

——総合学習の時間を通して、こどもたちに演劇指導を行っていらっしゃいますね。

上村：実を言うと、僕は子供が苦手なんです。なのに、なぜか皆寄ってくれること、なんとかやれているのですが 。子供達がこれまで口にしたことのなかった「ことば」を口に出し、やったこともない体の姿勢を体験させるんです。はじめは何を言っているのか分からないし、体のコントロールもできないですよ。でも、そのうちにふっと何かをつかまえた顔になるんです。その瞬間は、やっぱり「奇跡」ですよ。だから稽古の最中、「きみが舞台の上にいるということ自体が奇跡なんだ」って言います。実は私、子供だけで「ハムレット」が出来ないものだ、考えているんです。言葉と身体が新鮮に生きて立ち上がってくる瞬間を体験させてあげたいと思います。

——ゼーロンの会の今後の方向は？

上村：宮崎勤事件、酒鬼薔薇事件、オウム真理教のテロを経過して、僕自身の中にちょっとずつ堆積されていくことに気づかなかったんですけど、9.11を境にして、ストーリーが一貫した発端で満ちている、いわゆる音曲を書けなくなってしまった、そういう音曲で世界に対峙するのは無理なんじゃないか、僕は既存のリアルを失ったので、舞台でも言葉と身体を駆使して、新たなリアルを生み出したい。だから目下僕は、「しゃべる、語るな、沈黙する」を心掲えて新しいリアルの実感を探索しているのです。 次の公演は、現代美術館のアートロフトで6月13日に「カミーユ」を行います。老いたカミーユ・クロードの臨終、記憶の断片がとりとめもなく思い出される様子を女性二人が演じるものを準備しています。11月の公演では、空詩でのつぺらぼうな国家と きちんと対峙するための舞台、見えない内戦をモチーフにした刺激的なものを作り出したい。ペケットの言句「演劇は死んだ、演劇せよ」という大いなる矛盾を抱えながら、ゆるぎない演劇への愛情を舞台のうえに再現するのが、僕の目標なんです。

——ありがとうございました。

（3月3日、美術館応接室、聞き手：南嘉宏）

今月の展覧会

- ラップランド　ロバニエミ、ケミ町内　「ザ・スノーショー」(～3.31)
- ニューヨーク　ソロモン・R・グッゲンハイム美術館　「シングラー・フォーム」(～5.19)
- ベルリン　クンスト・ヴェルケ他　「ベルリン・ビエンナーレ」(～4.18)
- 福岡アジア美術館 (092－263－1100)　「インドのビデオアート展」(～3.21)
- 福岡県立美術館 (092－715－3551)　「近現代美術企画展　片山雅文展」(～4.4)
- 大分市美術館 (097－554－5800)　「野見山暁治展　うつろうかたち」(～3.25)
- 宮崎県立美術館 (0985－20－3792)　「コレクション展　第4期」(～3.31)
- 熊本県立美術館 (096－352－2111)　「海老原喜之助と熊本」展(～3.31)

今月の4コママンガ

イラストレーション：ことうまきふみ

編集後記

平成１５年度もいよいよ最終号。今年度も市内を中心に、さまざまな展覧会が活発に展開されました。ＡＫＬでは今年度も熊本、日本、世界と、さまざまな美術の動きをお伝えしてきましたが、改めて実感することは、私たちがこの熊本で頑張るということが、そのまま世界の美術界に直結しているということです。世界のどこかに私たちの表現の場所があるのではなく、まさしくこの生きている場所が世界のすべてなのだ、その思いと実践こそが、世界のどこでも通用する表現を生み出すということなのです。さあ、熊本市現代美術館もみなさんの精力的な活動に負けずに、頑張っていきます。応援のほど、よろしくお願いします。

編集長　南嶌　宏

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)
Shozan Kaneshiro
「書」のことを、日本では「書道」といっているが、中国では「書法」といい、韓国では「書芸」と呼んでいるのもお国柄か？

森山 淡草 (T.M)
Tanso Moriyama
注目を浴びた成る高校のスポーツクラブ。「何かをめざす心」を育てるため登下校の際にゴミを拾いながら歩かせている。また靴の乱れがチームの結束に影響すると、靴並べをきちっとやらせるという。指導者にも生徒にも敬服。

学芸員紹介

本田 代志子 (Y.H)
美術館搬入エレベーターを見た子供達が大喜び。いろんな発見の場でありたいと思います。

蔵座 江美 (E.Z)
別れと出会いの季節です。桜の花ももうすぐです。

金澤 韻 (K.K)
沈丁花がいい匂いです。春の訪れを予感させます。

坂本 顕子 (A.S)
斎藤義重さんは晩年もお肉を好んで召し上がっていたそうです。その元気見習いたい！

冨澤 治子 (H.T)
木々が芽を膨らませているのを見ると、去る冬の間、自分は何をどれだけ準備できたかと反省します。

山室 りさ (R.Y)
今が旬の魚、ヒラメ、肝を焼いて食べるとこれがまた美味い！

竹田 茜 (A.T)
今年の冬は厳しい寒さの日が多く、朝の通勤がつらかった 。

発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.19　2004年3月15日発行　○無料○
編集人／田中　章人
編集長／南嶌　宏　　担当／冨澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合　　デザイン／松永　社デザイン事務所
発　行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7503　FAX.096-359-7894